
フクシマ

酒井 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フクシマ

【Nコード】

N47710

【作者名】

酒井 真言

【あらすじ】

目を覚ますと、鈴木はなぜか山の中にいる。

鈴木が眼を覚まし上半身を起こした。紺色のジーンズを履いた下半身が、赤い花の咲く躑躅つづじの根元に突っ込んでいる。腿から下は完全に埋もれている（エツ？ 何ダコレハ？）。魂消た鈴木は足を引き抜いて立ち上がり、周囲を見回した（ココハ何処ダ？）。薄緑の葉が茂る灌木に囲まれた、登山道らしき傾斜の緩やかな道に突っ立っている（一体ココハ何処ダ？）。黄土色の地面は乾燥していて、石がほとんど混じっていない。

訝しい顔つきを保ったまま（何デ俺ハ、コンナ所ニ入ルンダ？）、忙しい眼を周囲に配りつつ細い道を下って歩くと、右前方の道の外れに巨大な塊がうずくまっている。鮮やかな茶色の毛に包まれた巨大な猪が、三匹固まって眠っているのである。さらにその遠く道の左側では、太腿たくましい鹿がつぶらな眼を鈴木に向けている。度肝を抜かれたが（オオ！ 野生ノ獣ダ！）、鈴木は声もあげずに足を動かした。

眠る猪を通り過ぎて雄々しい鹿に近づくと、鹿は一寸ばかり身動きをするも平然と鈴木を見つめ続ける。鹿の脇を通り過ぎると（立派ナ鹿ダナ、何年グライ生キテイルンダロウ？）、鹿は首を回して見つめ続けた。

そのまま細い下り道を歩き続けると、数種の獣とすれ違った。狸に狐、猿、熊、虎、土竜、牛、羊、象、イタチ、パンダ、アイアイ、モモンガ等々、大小様々、食い気の異なる獣と眼を合わせた。どの獣も見事な艶の毛を生やし、強烈な好奇の眼で鈴木の歩みを見つめた。逃げることも襲い掛かることもなく、動物特有の愛らしさをも

って見つめるだけであつた。鈴木は恐れ慄くどころか（何デソナニ、ジロジロ見ルンダヨ）、繁華街を裸のまま歩いているような恥しさに、どうにか我慢しているようだった。

十分もすると、遠くに古めかしい木造の小屋が見えた（ヤツタ、小屋ガアルゾ！ 誰カ居ルカモシレナイ）。下り坂に勢いをもらい、腕を振って小屋へ向かう。眼を丸くした栗鼠の横を通り過ぎると、舞い上がった砂埃に驚いて灌木の茂みに引っ込んだ。

小屋に近づくと、屋根をまたぎ両側の壁面から灌木の茂みに向かって、色あせた緑のフェンスが張られていることに気がついた（恐ロシイ大キサノフェンスダ。コンナサイズ、見タコトナイゾ）。歪むところのない頑丈なフェンスは、鈴木の上背を三十重ねるほどありそうな高さである。鈴木は小屋の前に立ち止まり、一呼吸置いて（誰カ居ルトイインダケド……）、壁面と同じ茶色のドアをノックした。

額の汗を袖で拭いさると同時にドアが開き、チエック柄の襟付きシャツを着た細面の老人が姿を現して、「おや、こいつは驚いた！』と言つ言葉とは似つかない鈍臭い笑みを浮かべる。

「すみません、ちょっと訊ねたいことがあるんですが……」鈴木は申し訳なさそうに（アア良カッタ！ 人ノ好サソウナ爺サンダ）老人に話しかける。

「ああ、どうぞどうぞ、中に入ってくださいな」老人はさらに顔を皺くちやにさせて、鈴木を中に招き入れた。

明るい色した木製の事務机が、部屋の中央にぼつんと据えられている。向かいには別のドアがあり、その側に色の濃い三人掛けのベ

ンチが壁にかかり、純白の給食服を着た老婆が小さく座っていた。小柄な老婆は湯飲みをすすっている。鈴木が会釈するより先に、老婆は顔を変えず深々と頭を下げた。

「今茶を入れますから、どうぞ椅子に腰掛けてくださいな」老人が事務機の椅子を引く。

「あつ、はい……、えつ、あの……、ここは何処ですか？」鈴木は椅子に眼もくれずに老人に訊ねて、すぐに老婆へ顔を向ける。

「はつはつはつ、山からおりてきたというのに、おまえさんは変てこなことを聞くもんだな、なあ田畑さん？」事務機の上に置いてある魔法瓶に手をかけて、老人はベンチに座る田畑さんに眼をやる。

「平助さんや、そう笑うもんじゃないよ。お若い者が突拍子もなく言うぐらいだから、何かわけがあるんだろうさ」顔色変えず田畑さんは話す。

「いったい、ここは何処なんでしょうか？ おかしな質問かもしれないが、どうか教えてもらえないでしょうか？」笑われたことを気にもせず鈴木が再び訊ねる。

「ここは 山麓の小屋だよ。ほら、おまえさん、山からおりてきたのだから、登る前にこの小屋を一度通っているはずだよ？ 忘れたかい？」平助さんは白茶の湯飲み茶を注ぐ。

「 山？ 初めて聞く名前です。何処にあるんですか？」鈴木の眉が少しばかり曲がる。

「こりゃおかしい！ 山の名前を知らずに山からおりてくるばかり

か、山の場所さえわからないとは！」平助さんはたまらず笑い声をあげる。

「平助さん！　まじめに訊ねる者に対して失礼だろ！　お若いの、ここはフクシマの　山だよ」田畑さんは平助さんをきつと睨んでから、落ち着いた声で鈴木に話しかける。

「フクシマ！」鈴木が驚いて声を出す。

「そんなに驚くとはね。お若いの、あんた一体どうしたんだい？　そんなところに突っ立てないでさ、ちよつとここに座つて、事情を話してごらんよ」田畑さんが呆然とする鈴木に手招きする。

「そつだそつだ、頭の鈍つた老人に納得できるよう、ちよつとばかり身の上話できんか？」やけにうれしそうな顔して鈴木に茶を手渡すと、平助さんはベンチ指して手を伸ばす。

「ああ、すみません」

湯飲みを両手に添えて鈴木はベンチ向けて静かに歩き（ナンテコトダ、此処ハフクシマカ）、おもむろに腰かける。平助さんは事務机の椅子に腰掛ける。老人二人からの視線を尻目に茶を一飲みすると（温イ梅昆布茶ダ）、鈴木は体が萎むほど息を吐いてから話した。

「あの、とても信じられないかもしれませんが、わたしさつきまで家で寝ていたんですよ。それが眼を覚ましたら、此処の山道で起きまして……」爺さん婆さん交互に眼を向ける。

「はっはっはっ、おまえさんの家は　山かい？　途方もなく大きい家に住んでいなさるな、こいつはたまげた！　とすると、おま

えさんは天狗かい？ それとも神様かい？」平助さんが豪快に笑い出す。

「うるさい爺さんだ！ 人が真剣に話すのを邪魔するんじゃないよ！ お若いの、じじいに気にせず話を続けるんだよ」皺の浮く顔から、田畑さんが年季の入った睨みをきかす。

「いえいえ、笑われるのもあたり前なので、どうぞ気にせず笑って聞いてください。わたし自身、頭がおかしくなったのかと疑うほど随分おかしな出来事ですから。むしろ、実際頭がおかしくなったのかも知れません。ふり返って考えてみても、どうも現実離れしていて、自分自身で笑ってしまいます。ははは、一体わたしはどうしたんでしょうか……」鈴木は渋い顔をしてひきつっている（ハハハ、ハハハ）。

「いや、すまんすまん、もう笑わんから気を悪くせんでくれ。わたしはどうも周囲を気にせず笑い出す癖があつての、笑いの虫が突然こみ上げてきて、自分でも抑えられんのじゃ。そのせいでな、若い頃から冠婚葬祭にはあまり好い思い出がなくてのう、亡くなった婆さんと初めて顔を会わした縁談では、そりゃひどい体たらくなもんで、物好きな婆さんでなかったら、とても結婚なんぞできるもんじゃなくてのう、ほんととおっ恥しい目にあつたもんさ、そればかりか、婆さんの葬式でもえらい恥をかいてしまつてな、周りの方々からひどい叱責をつけたもんで、またその叱責がわしの笑い袋を刺激してのう、ほんとひどいありさまじゃつた、もう婆さんとの出会いから別れまで笑い通しで……」平助さんが慣れた調子で話しだす。

「じじい！ あんたの話はいいんだよ！ ちょっと黙つといてくれ」

田畑さんが大声を出して手を振りあげる。鈴木は微笑みながら茶

を口に入れる（フッフ、カワイソウニ）。

「平助さん、あとで話の続きを聞かせてください」鈴木がうれしそうに言う。

「おお、いいともいいとも、いくらでも話してやろう、わしの突飛な笑いといえば村中の者の評判でな、冠婚葬祭がある度に……」平助は椅子から立ち上がり、鈴木に歩み寄ってくる。

「うるさい！　じじいがしゃべったら話が進まんだろ！」

田畑さんは地に落ちていた小枝を拾い、平助さん目がけて投げる。頭に力なく小枝がぶつかり、「すまんすまん」言いながら平助さんはへこへこと椅子に戻る。それを見て（話シテモ大丈夫カナ？）鈴木は緩んだ口を開いた。

「わたしは東京の世田谷に住んでいます。住むといっても、アパートでの一人暮らしですが……、それで今日の昼間、仕事が休みをいいことに、アパートで映画を見ていたんですよ。恥ずかしいことに何も予定がなくて、一人で菓子を食べながら、こう、寝転がっていいんですよ」

鈴木は首を横に傾げて耳に手をあてると、上半身を弓なりに反らす。

「退屈な映画を選んでしまったせいで、集中しきれずにぼんやりと観ていたんですよ。たぶんその間に寝てしまったんでしょう、それからふと眼を覚ましてみると、見知らぬ野外に寝転がっていました。それも呑気なことに、赤い花の咲いた躑躅をかけ布団代わりにです。本当にびっくりしました」

鈴木が左手を顔の傍に持ち上げて、痙攣するように震わせる。

「わしゃこれでも、人生長く生きとるつもりじゃが、そんなけつたいな話聞いたことないのう。なんだか狐につままれたような心持じや」平助さんは背もたれによりかかり、机の上の湯飲みに手を伸ばす。

「ええ、そんな狸に化かされたような人、あたしもてんで聞いたことないね」田畑さんが神妙な面持ちで頷く。

「ええもちろんです、わたし自身いまだに信じられません。なんだか、こうして話しているのも、夢の中にいるような気がしてしまいます……」そう言って鈴木は茶をすする（ホント、ドウシチャツタンドarov……）。

「そいつはたしかに夢のような話じゃのう、けれど夢となっちゃあ、わしは一体なんなんだろうな？ はっはっはっ、あんたの夢の中にいるのだとしたら、眼を覚まされたら困っちゃうぞ！」平助さんが両手を大きく広げて話す。

「ええ、ほんとですね。けど、平助さんを見ると、わたしの夢では思いつけないほどユニークですよ」鈴木は平助さんを見てから、田畑さんに顔を向ける。

「夢じゃあないとすると、あれかい、眠っているうちに、映画の世界に飛び込んだじまつたてやつかい？」平助さんは眼をひん剥いて話す。

「ははは、だとしたら、平助さんも田畑さんも、若いアメリカ人じ

やなくちゃおかしいですよ」鈴木はくすくす笑う（マサカ、コンナ老人ノ出テクル場面ハナイダロウナ）。

「おい田畑さん、困ったことに、わしら実はメリケンらしいぞ！あの太平洋戦争での勇姿は何だったんじゃ？ 本当はとつくにおっちんでいたのかい？」平助さんが勢いよく突っ立って背筋を立てる。

「馬鹿言うんじゃないよ平助さん！ お若いのも、暇な爺さんの相手なんかせんでいい。それでなんだい、歩いて小屋へやってきのかい？」田畑さんの眉間には幾重の皺が寄っている。

「あつ、はい、すこしばかり歩いたらこの小屋を見つけました。そういうば、途中獣だらけで驚きました。野生の獣なんかほとんど見たことありませんから、最初は襲われるかと思っただけで心配しました。でも不思議ですね、どの獣もわたしをじっと見るだけで、何もする気配がありませんでした。熊が現れた時はどうしようかと思いましたが、静かに歩いていたら見過ごしてくれましたよ。それから虎や象が現れても、なぜか安心して過ごすことができました」

鈴木は田畑さんの細い眼を見つめて話した（ナンテ力強い眼ヲシテイルンダ）。

「ああ、やつらは皆立派な生き物じゃよ」田畑さんが重々しく話すと、同時に平助さんもゆっくりと頷く。

「そうですか……、それにしても、張られたフェンスは立派ですね？ あれだけのフェンス見たことないですよ」鈴木は田畑さんから平助さんに顔を移す。

「ああ、そうじゃ、山は恐ろしいからな」

平助さんがやけに真面目な顔して話すと、ふと会話が止まった。続きを話し始めるのを待つ鈴木は（二人トモ急二人シクナツタナ）、眼で問いかけるよう老人二人を交互に見やる。二人とも考え込むようにじつとして微動だにしない。都会では聴くことのない小鳥の囀りが、長いフレーズを重ねてどこから響いてくる。鈴木は息が詰まった（ナンダカオカシイゾ？ 変ナ事ヲ聞イテシマッタノカ？）。

「平助さん、あたしはお暇するよ。そろそろ仕事に戻らないとね」
田畑さんがそう言っておもむろに立ちが上がる。

「おお、そうかそうか」平助さんがつられて動き出す。

「お若いの、どうだい、腹は減ってないか？ あたしがちょっと食わしてやるからついてきな。すぐ東京へ戻るにしても、飯食う時間ぐらいはあるだろう？」 幾分背中を曲げたまま田畑さんがドアに近づく。

「えっ、はい、助かります。ちょうどお腹が空いていたので、でも平助さんの昔話をまだ聞いていないので……」 鈴木は確かめるように平助さんを見る（行ッテイイノカナ？）。

「爺さんの昔話なんぞ、打っちゃっておけばいいさ。さあ、行くよ」
田畑さんはドアを開ける。

「おいおい、孤独な老人に向かってひでえ言い草じゃな。まあいいさ、なあお若いの、とんだ目に遭っちまったが、せつかくフクシマにいるんだからゆっくりしていきなされ。なんも予定がないなら、すぐに東京に戻らずに、またわしの小屋に遊びにきなされ」

平助さんは立ち上がった鈴木の背中を無遠慮に数度叩く。

「まだ何も考えていませんが、フクシマに残るようでしたら、もう一度顔出します。まだ昔の話も聞いてませんか、あつ、梅昆虫茶おいしかったです。ごちそうさまでした」鈴木は小さく頭を下げる（何デ老人ハ、コウ、馬鹿力ナンダロウ）。

「ああ、いいっていいって、せつかくの縁だ、東京に戻ってもまた遊びにきなされ、ただし、遅くなると爺さん天国にいるかもしれないかな。はっはっはっ！」平助さんは豪快に笑い、今度は鈴木の前をばしばし叩く。

陽気な顔して見送る平助さんを何度も振り返り、鈴木は老人らしいのんびりした足取りの田畑さんについて行った。

所々くぼんだ小石の混じる地面を歩き続けると、田畑さんにおびえて避けるように両側の木々は離れて、道は随分と広くなった。すこしするとアスファルトの道路につながった。小屋を出たきり言葉を発しない田畑さんは、後ろからついてくる鈴木を確認すると、道路を左に折れる。先程の山についての質問が頭にこびりついてしまい（マタ変ナ事訊ネテ、気マズイ思イスルノハ嫌ダナ）、鈴木は自ら話題を持ち出す気になれなかった。弓なりに曲がる田畑さんの背中を見て（年齢ノ重ネト共ニ、風格ガ増スنداロウナ。小サナ体ナシテ問題ニナラナイゾ）、山で見た動物達を思い出す。

東京の新興住宅街には見られない昭和らしき家々が、互いの距離を気兼ねすることなく畑を挟んで建っている。「畑の主は此処だ！」と云わんばかりに、存在感のある立派な家ばかりである。わずかにひびの入ったアスファルトの上には、東京でも見ることのできる車

が悠々と通り過ぎる。鈴木はフクシマを生まれて初めて見た（フクシマツテイヤ、フクシマカモ知レナイケド、フクシマナンテ想像シタコトナイカラナ。マダ中国ノ方ガ想像デキル。ナンカ不思議ダ）。

黄色のゼラニウムが一面に咲き広がる花壇を過ぎると、田畑さんは花壇の脇に建つプレハブに足を向けた。黄色が斑々する花々に見とれていた鈴木は（鮮ヤカ過ぎテ、コノ世ノ物ラシクナイナ）、プレハブの入り口に近づく田畑さんに駆け寄る。振り返った田畑さんの顔に、かすかな笑みが浮かんでいるように見えた（皺ダラケデ判断ガツキニクイ。アレグライノ年ニナルト、怒リモ笑イモ、同ジ顔デ済ムノカモシレナイ）。

引き戸を開けると、田畑さんはすたすたと中に入った。入り口の平石の上で鈴木はたたずみ、体を心持前に倒して覗きこむ。田畑さんと同じ白衣を着た人が幾人確認できたところ、「東京からお客さんがやって来たから、あんたらもてなしてあげなさい」田畑さんは威勢よく声を響かす。間髪入れずに、男女混じった若い返事が重なった。

「ほらお若いの、遠慮なく入りな。すぐに飯を用意させるから、ここに座って待ってな」干からびた手で田畑さんが招く。

「どうも、失礼します」鈴木は板張りの床に足を踏み入れる（田畑サンハ、此処ノ親分ナノカ？）。

桜材らしき重厚なテーブルの前に鈴木が座るのを見て（迫力ノアルテーブルダ）、田畑さんはすたすたと奥の部屋へ入ってしまった。鈴木は心細く田畑さんの背を見送るとすぐ（アア、行ッチャッタ）、上背のある姿に似つかわない、小動物らしい警戒を周囲に向ける。

目の前には猫目の女が座り、その隣には、ピンポン球のような頬を張らした女がテーブルに手を置いていた。右奥には、鷺鼻の男が立ちながら茶の用意をしつつ、傍に立つ餃子のような耳した男に声をかけている。全員してくらげ形の帽子をかぶっている。どうやら十代後半のようである。

「お兄さんお兄さん、東京から来たの？ 何？ なんで来たの？ 婆ちゃんの親戚？ 観光しに来たの？」猫目の女は鈴木に眼を合わせ、思うままに話す。

「吉ちゃん、観光はないよ。東京の人がわざわざ、こんな何も無い田舎に来るわけないじゃん。婆ちゃんの親戚で郷帰りに来たんだよ。ほら、前に婆ちゃんがさあ、尻からサナダムシが出てきた甥っ子の話をしたことあるじゃん？ きつとその甥っ子がこのお兄さんだよ」頬の張った女が吉ちゃんをさえぎる。

「わからないよ慶ちゃん、 山や 山があるじゃん。このお兄さんは登山家で、ちよつとばかりし体を慣らしに来たかもしれないじゃん」吉ちゃんが大きい眼をさらに開かせる。

「あんなのただの山じゃん。なんで名の知られてない山に、東京の若いお兄さんが山登りに来るわけ？」慶ちゃんが二度ばかり鈴木の顔を見る。

「そんなの知るわけないじゃん」吉ちゃんは平然と答える。

「おいおまえら、茶の用意もせずに、お客さんの前で失礼な態度とるなよ。お兄さんが困ってるだろう」鷺鼻が鈴木目の前に湯飲みを置く。

「そうだぞ、本来こういうのはな、女がするもんなんだぞ」餃子の耳が次いで話しかける。

「なによ浩二、あんたが率先して動いたんじゃないよ」吉つちゃんが鷲鼻の浩二に向かって話すと、「初男、あんたなんかくつついてるだけで、何もしてないじゃん！偉そうにして何様のつもりなの。わたし達がお客さんをもてなしていたのが、あんたにはわかんない？」餃子の初男に向かって文句を叩きつける。鈴木は薄ら笑いを浮かべて黙っている（弱ツタナ、人ノ話ヲ聞カナイ、自由奔放ナ高校生バカリダ）。

「あんなのはもてなすって言わねえぞ、もてなすてのはな、もっと大人らしくやるもんだ」浩二が鈴木の際に座る。

「そうだ、そうだ、もっと大人らしくやるんだぞ」初男は鈴木を挟んで座る。

「大人らしくってどういうこと？」慶ちゃんは初男に目もくれず、浩二に向かって言う。

「ぎゃあぎゃあ話すんじゃないよ、もっと、こう、大人らしく受け答えるんだよ」浩二がはつきりと言いきる。

「そうだよ、おまえ達のはただ喚くだけだぞ」浩二が句を切ると同時に、初男は偉そうに話す。鈴木は湯飲みの口に息を吹きかけている（コイツハマイッタ！フクシマニ居ル理由ヲ話シタラドウナルンダ？トテモマトモニナンカ話セナイ）。

「あんたら馬鹿じゃない？ ぜんぜん説明になってないじゃん！おつむの足りない口じゃわからないから、実際に試してよ、ほら、

初男、あんたちよつとお兄さんをもてなしてごらんよ。ねえ」吉ちやんは笑いながら話す。

「あはは、だめだって吉ちゃん、柔道しか知らない受身男に、東京の人をもてなせるわけないじゃん」慶ちゃんは口を開けて笑う。

「馬鹿にすんじゃねえおまえら！ 初男は受身だけじゃなくて足技だってできるんだ、もてなしぐらいできんぞ。なあ、初男、ちよつとこいつらに、大人らしいもてなしを見せてやれ」

浩二は鼻先まで真っ赤になると、信じきつたようすで初男に話しかける。間に挟まれている鈴木は、飲んでいる茶を噴出しそうになる（オイオイ、初男君二何がデキルンダ？ 一体ドンナモテナシラサレルンダ？ 才願イダカラ普通ニ放ツテオイテクレ）。

「お、おう、大人らしいとこ見せてやるぞ」

異常な力でこぶしを握り固めた初男は、痙攣したように首を上下に振りながら浩二に返事する。浩二も同様に首を振り、光を放つほど眼をぎらつかせている。女子二人は眼を合わせて、耳をつんざく笑い声をあげている。

女子の笑いが収まり、妙な静けさをもって、鈴木を含めた四人は初男の動静に注意した。初男はあれこれ頭を巡らしているらしく、沈黙をつつく自らの鼻息の荒さに気がつかない。

考えているばかりで初男は一向動き出さない。女子二人は両手に口をあてて必死で笑いをこらえている。浩二はたまらず、「初男、がんばれ！ がんばれ！」余計な声をかけると、「お、おう」初男もあわてて返事をする。落ち着かずにはびちびと茶ばかり飲んでい

る鈴木は、またもや噴出しそうになった（コレハヒドイ！ モウ罰ゲームジャナイカ。ソレモ、罰ゲームノ相手ガ自分トハ）。

するとようやく初男が口を開いた。

「こ、こ、講道館は、行ったことありますか？」どもりがちの声が聞きとりにくい。

「え、えつと、まだ行ったことはありません」鈴木もつられてどもつてしまう。

それを聞いた女子二人が強烈に破裂すると、それを見た浩二も負けじと破裂した。鈴木が苦笑いを浮かべる（シマッタ！ 氣ヲ利カセテ、モットマシナ返事ヲスルベキダツタ。ツイツイ、真正面カラ受け答エテシマッタ！）その隣では、うつむいた初男が鼻息ばかり激しくしていた。

そこへ突然奥の扉が開かれた。背の曲がった田畑さんが前に立ち、その後ろには顔立ちの整った女性が、給食らしい食事を左右の手に持って現れた。その女性は給食盆を持っているが、なぜか黄色い衿付のワンピースを着ている。テーブルを挟んで対峙する若者達は早々に席をはずし、笑いの余韻を残したまま奥の部屋へ去っていく。鈴木は若者達に目配せすることも忘れて、その女性の姿に釘づけになっていた。

田畑さんと女性がゆっくりとテーブルへ歩み寄る。給食盆の一つを鈴木の目の前に置くと、女性は静かに鈴木の正面の席についた。それを待っていたように、テーブルの端に立つ田畑さんが口を開く。

「この子もあなたと同じでな、昨日の昼、突然 山からおりてき

たんだよ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4771o/>

フクシマ

2010年10月24日00時44分発行